

エーゲ海をめぐる

この「エーゲ海をめぐる」と次の「ペライエウスからアカデメイアへ」は実際に定期試験に出した問題です。架空の会話文ですが、文章として読んでも、おもしろいと思えるものをつくり、哲学者たちの話が抽象的なものではないということを感じてほしくてつくってみました。気楽に読んでください。

アリストテレス：「エーゲ海をめぐる古代ギリシア文化を考える会」にご参加の皆さま、私が本日の会の幹事を務めますアリストテレスでございます。この会の幹事兼進行役をするようにとの木戸君からの強い要請がありました。古代ギリシア最大の学者との評価をいただいておりますが、考えてみれば、この会に参加なさっている方々の中では私が一番の若輩者ですから、仕方なくお引き受けしました。いたりませんが、よろしくご協力をお願いします。それはそうと、皆さまお急ぎください。まもなく船が出ます。時間がございません。皆さんご乗船くださいましたか。・・・それではここ、アテネのペライエウス港を出船いたします。船はまずは東にむかいエーゲ海を横断、美しい島々を眺めながら小アジアのミレトスに向かう予定です。ご覧下さい。右手かなたにサラミスの海峡が見えますでしょうか。サラミスというとアテネ出身の方々は懐かしい想いをお持ちではないでしょうか。なにしろ、あの海戦はペルシア戦争の勝利を決定づけた輝かしい戦いでしたからね。今日、私どもがはじめにとる航路は、ちょうどあの戦争の初めの戦いの時に、ペルシアの海軍の一部がギリシアに向かってやってきたコースを逆にたどることになります。どうでしょう、ヘロドトスさん。あなたは「歴史」の中でペルシア戦争のことをお書きになっていますね。何かお話いただけないでしょうか。

ヘロドトス：私はあの戦いを「自由と奴隷の戦い」と解釈しました。確かにペルシアは大帝国でした。それに比べてギリシア世界には小さなポリスしかありませんでした。でもペルシアではペルシア大王以外はすべて奴隷です。それに対してギリシアでは、多くの市民は豊かではないとしてもそれぞれ誇り高い自由人です。だからあの戦いは自由人による自由を守るための奴隷の軍との戦いだったのです。ギリシアは勇敢に戦いました。ここからは見えませんが、左手のはるか後方のマラトンでアテネの兵士はペルシア軍を撃退しました。オリンピックの競技にもなった種目はこのマラトンの戦いを記念してのものです。また右手のサラミスの海戦はギリシア人にとっては語り草ともなった戦いでした。

アリストテレス：本当にサラミスを経験した戦士たちはギリシア人の誇りでしたからね。それにしてもサラミスの海戦勝利の後、アテネの繁栄は目を見張るものでした。ペリクレスさん、あなたの指導のもとにアテネは民主制を完成していきました。その当時のことについて何かお話いただけませんか。

ペリクレス：確かに、当時のアテネは私たちの誇りです。誰でも能力さえあれば国事にたずさわることができる体制になりました。アテネのアクロポリスの頂上に燦然と輝くパルテノン神殿もあの時期に私が再建したものです。

アリストテレス：ギリシア人が自らをヘレネスと呼び誇らしく思い、また異邦人をバルバロイと呼んでさげすむようになったのもあの戦争のあとからではなかったでしょうか。そしてギリシア文化を生み出していったのも、もとはといえばこの美しいエーゲ海でした。ところで、クセノファネスさん。さっきから浮かない顔をなさっていますが、どうしましたか。

クセノファネス：実は、このツアーを楽しみにしていたのに、ホメロスやヘシオドスが同行しているのが気に入らないんだよ。だいたい彼らは、神々についてありとあらゆる無法な仕業を語ったんだからね。真の神は彼らが言うようなものではなくて、ただ一つで死すべきものどもとは全く異なるものなのだ。

アリストテレス：まあ、そうおっしゃらずに。ホメロスさんは多くのギリシア人から慕われている民族を代表する詩人なのですから……。まあ、仲良くお願いします。……。皆さん、船はデロス島を通過しました。そしてご覧下さい！前方の遙かかなたにアナトリア（小アジア半島）が見えてまいりました。どうでしょう。タレースさん。私はあなたからギリシアの哲学が始まったと思います。あなたこそ、ホメロスさんやヘシオドスさんが伝えたギリシアの神話とはことなる合理的思考をはじめられた方だと思っております。

タレース：いかにも、わたしの「万物のアルケーは水」という説こそ、神話とは異なる哲学のはじまりでした。それにしても懐かしいね。前方にミレトスが見えるよ。私の故郷だよ。

アリストテレス：タレースさんたちミレトス学派の方々は、私から言わせると素材という形でのアルケーを探求なさいました。ミレトスこそ、ギリシアの自然哲学の発祥の地です。ところで皆さま、船はミレトスを右手に見ながら北上をしております。ご覧下さい。左手前方にサモス島が見えてまいりました。サモス島といえばピュタゴラスさ

ん！ あなたはこの島の出身ではありませんでしたか。

ピュタゴラス：そうですね、私はミレトス学派の方々とは違う考えです。私たちギリシア人は宇宙をコスモスと呼びますが、コスモスとは「秩序」という意味で、宇宙に秩序を与えているものこそ、数なのです。

アリストテレス：確かに、ピュタゴラスさんが持ち込んだ数の概念は哲学の歴史に新たな要素を持ち込まれたと思います。あ、皆さま、右手をご覧ください。右手にはエフェソスが見えてまいりました。エフェソスといえば、ヘラクレイトスさん。あなたの故郷ではありませんか。あなたは気難しい方ですが、一言で結構ですから何かお話をいただけますでしょうか。

ヘラクレイトス：私は君たちのような俗物と話などしたくないが、まあ、私の故郷を通過してくれたお礼に、一言だけ。「万物は流転する」この有為転変の世界に秩序を与えるものこそ、私たちが知らなくてはならない大切なことなのだ。

アリストテレス：確かにヘラクレイトスさんの言葉は謎めいて難しいですね。それはそうと、パルメニデスさん。何かヘラクレイトスさんに言いたいことがおありのようですが。

I：いや、何も言う事なんて無いよ。馬鹿らしくてね。第一、万物は流転するなんてことはあり得ないんだよ。有るものは不変不動、不生不滅、唯一絶対なので、これこそ真の世界なのだ。この世の変化生成は、単なる人間の思いなしにすぎないんだよ。

ゼノン：そうですとも先生の仰るとおりですよ。「アキレスは亀に追いつけない」ということを私が証明したのも、雑多な世界がいかに偽りであることを証明するためでした。

アリストテレス：エレア学派のお二人の主張は、ギリシアの思想界に衝撃をあたえました。多元論者と呼ばれるエンペドクレスさんやアナクサゴラスさんが登場したのも、エレア学派の影響だと思えます。そうこうするうちに、皆さん、船はアナトリアの海岸をすぎようとしています。ヘレスポントス（ダーダネルス海峡）を右に見て、左に舵をとってよいよトラキアです。今日ご乗船の方の中でトラキアのアブデラ出身の方がお二人いますね。デモクリトスさん。今までの自然についての研究はあなた哲学まで展開すると、現代の自然哲学的な世界観と似たものになりますね。

デモクリトス：私は現代の自然科学のことは知りません。でもこの世界はこれ以上分割が

不可能なアトムの離合集散に過ぎないのです。私たちが今眺めているトラキア地方の美しい海岸も、まもなく見えてくるはずの懐かしい私の故郷、アブデラも、みんな、私たちが美しいとか懐かしいとか思っているだけです。真実の世界は無味無臭の物質であるアトムが構成する世界なのです。

プロタゴラス：なんとも味気ない考えだね。同じ故郷の後輩にこんな考えの人間がいるなんて情けないよ。だいたい、私から言わせると自然の研究なんてのはつまらないものさ。人間は万物の尺度だよ。私にとっては自然よりも人間の方が興味があるね。何にしても、世界の果てに美しい何かがあっても、広大な宇宙が驚きに満ちていようと、それらを美しい、とか広大だと感じるのは人間なのだ。人間こそ万物の中心にあるのだよ。

アリストテレス：プロタゴラスさんは一般にソフィストを代表する方との評価ですが、今お話を伺っていると、ソフィストについての評判とは違う印象を受けて意外ですね。

トゥキュディデス：それはプロタゴラスさんのせいではありませんよ。ソフィストたちが特に悪い評判をうけるようになるのは、ペロポネソス戦争が原因ですよ。この戦争はアテネとスパルタの対立がギリシアのポリスを二分する戦いになるのですが、私はこの戦争の重大性を思い、是非これは記録に残さなくてはと思いました。だから私は「戦記」を書いたのです。この戦争は本当に甚大な被害を、物心ともにギリシア世界に与えました。とりわけ疫病！疫病の流行は人々の敬神の精神も奪いました。「それはノモスにすぎない、ピュシスにおいては・・・だ」との表現が流行し、今までギリシア人が大切であると考えていた価値の多くが軽視されるようになるのは、とりわけ、この戦争を契機としてでした。プロタゴラスさんの「人間尺度論」がそのような議論をするソフィストたちの理論的武器となりましたが、それはプロタゴラスさんのせいというより戦争による精神的荒廃のせいでした。

アリストテレス：本当に、戦争はいつの時代にも人間の心を荒廃させます。戦後のポリスの衰退は誰の目にも明らかになりました。やがてマケドニアが不気味に勢力を拡大しようとしたときに、それに関してギリシア世界がどのように対応すべきかという点で、議論がおこりましたね。イソクラテスさんとデモステネスさんの間の論争です。歴史を振り返ると、イソクラテスさんのお考えがその後の歴史の真実についていましたが、ギリシアを愛する人々の心は、デモステネスさんに同調せざるをえなかったのでしょう。・・・ちょっとしんみりしてしまいました。皆さま、船はずでにギリシア本土を右手にみながらエーゲ海を南下しております。最終目的地のアテネのペイライエウス港につくまでしばらくの間、この美しい海をご鑑賞ください。なお、ペイライエウス港

にはソクラテスさんをはじめアテネの人たちが多く皆さまをお待ちしています。ここでは、第二部として、ソクラテスさんを囲んでアテネを歩く会が予定されています。ご出席される方はそのまま私どものあとにお続きください。

・ ・ ・ ・ 場面はアテネの中心からペイライエウス港に続く道にかわる ・ ・ ・ ・

カイレポン：ソクラテス、ソクラテス！ 急がないと船が着いてしまうよ。

ソクラテス：やあ、カイレポン。そんなに急がせないでくれよ。アテネの町を歩くのは、僕が毒杯を仰いでいらい、本当にひさしぶりなんだからね。

カイレポン：ソクラテス、僕はその点については、ずいぶん心配もし、また、責任も感じているんだよ。何しろ、僕の持ってきた神託が君の人生を大いに狂わせてしまったんだからね。

ソクラテス：カイレポン、君が責任を感じることは何もないんだよ。僕はむしろ、あの神のお告げを受けて自分の使命を知ることが出来たと思って、かえって君に感謝しているくらいだ。僕があの裁判に敗れたのは、むしろ、君の横にいていっしょに歩いているアリストファネスのせいかもしれないよ。何しろ、彼ときたらあの「雲」の中で、僕のことをソフィストと同じように扱って僕を笑いものにしてくれたんだからね。

アリストファネス：ソクラテス、もう昔の話はやめにしよう。それに君だって、僕のことを恨んではいないだろう。何故って、君を敬愛するプラトンが「エロース」についてあの対話篇で君と僕とを同席するように企画してくれて、あの時も和やかに話しあうことができたものね。僕がどうしても言いたかったことは、僕たちの生きている時代が我慢できなかったということなのさ。それに自然を探求する哲学者たちは、僕たちの神をないがしろにして、神の業を自然現象として説明してしまうんだ。

ソクラテス：その点については僕も同感だな。僕も若いころは自然の探求に没頭したことがあったけれど、君が言うように、自然の研究には満足的ないものがあつたんだよ。もともと、僕の自然哲学への不満は君が今言った不満とは少し異なるけれどね。それにしても僕が生涯の後半生を生きたアテネは本当に荒廃していたね。正義・勇気・節制なんて言葉はみんなノモスにすぎないということで片付けられてしまうのだからね。

アリストファネス：本当に、僕たちの時代は大変な時代だったよ。それは21世紀の時代でも同じような状況だそうだ。だからこそ、今日は、ギリシアの賢人たちが集まると

ころで、君の考えを聞きたいと思ってるんだ。一体、僕たちはどう生きたらいいのかと。君なら何か僕たちのヒントになることを語ってくれると思うからね。

ソクラテス：皮肉な男だね。死んでいる僕にどう生きたらいいかを語れというのかい。正直に言うと、僕自身もよくは分からないんだ。でも、ソフィストたちの幸福観や人間のあるべき姿についての考えについては、僕は反対だよ。大切なことは、外見よりも中身、つまり魂をより善いものにすることなのさ。

カイレポン：ソクラテス、ちょっと質問してもいいかい。君はさっき僕が持ってきた神託から君の使命を知ることになったと言ったけど、説明してくれないかい。

ソクラテス：僕は日ごろから「自分は本当に知るべきことを何も知らない」と思っていたんだ。つまり、無知の知だね。そういう僕が「人間の中で一番知恵がある」とはどういうことか、と考えたのさ。その時、僕はデルポイの神殿のあの銘を思い出したんだ。そうしたら分かったのだ、人間の知恵がどんなものかってね。それから僕は自分自身の使命を理解したんだよ。でももうずいぶんしゃべり過ぎたようだ。ほらペイライエウスに着いたよ。ほらあそこでアリストテレス君が手をふっているよ。急ごうじゃないか。